

父(前園長)のこと

初瀬基樹

父(前園長)の葬儀に関しましては、ご多用の中にたくさんの方々にご会葬頂き、また、からたち会からは、お花を送って頂き、葬儀後もみなさまから温かい励ましのお言葉をたくさん頂戴し、本当にありがとうございました。

父は、一昨年(2019年)の4月に「骨髄異形成症候群」という血液の病気を発症し、その時点で「余命半年」と言われておりました。また、その年の12月には病名が「急性骨髄性白血病」へと転化し、そう長くはないと覚悟しておりましたが、1年半を超えてもなお、生かされていたことに感謝の毎日でした。

昨年の8月からは、ずっと入院生活で、最期は義兄の病院に転院させてもらい、母も一緒に泊まりこみ、まるで病室が自宅のようになっていました。義兄の病院は、よほど居心地が良かったので、それまで人前で歌ったりすることなどなかった父でしたが、看護師さんと童謡を歌ったり、風呂に入れてもらったときには「いい湯だな～♪」と口ずさんだり、母が自宅に帰りたいか尋ねても、「ここがいい」と答えるほどだったそうです。

私もほぼ毎日、仕事を終えて病院に顔を出しておりましたが、たまたま用事で、病院に行けなかった日の翌朝(12日)、母から「明け方から眠り続けていて目を覚まさない」と連絡を受けました。ただ、「気持ちよさそうに寝ているので急ぐ必要はない」とのことだったので安心していました。仕事を早目に切り上げて病院へ向かうつもりにはしていましたが、夕方になって急変し、父はそのまま息を引き取りました。私も、毎日学校帰りに病院に寄って父を力づけてくれていた娘たちも間に合いませんでした。ただ、苦しむことなく旅立つことができたのは救いだったと思っています。病室の父は満足げな笑みを浮かべ、やすらかな顔で眠っていました。

父が築いてきたこの保育園を、残された私たちがこれからも守っていかなくてはなりません。私が父と園長交代をしたのは2008年(平成20年)でしたので、父のことをよく知らない方も多いかと思います。父は、この保育園を始めるまでは、教会の牧師をしておりました。保育園の園長になってからも、九州女学院(現:ルーテル学院高校)で聖書科の授業を受け持ったり、玉名教会や松橋教会などで説教を行ったりしてきました。もちろん、この保育園においても、毎週、子どもたちとともに礼拝を守り、職員と聖書研究なども行ってきました。それは園長を交代した後も、体が動くうちは続けてくれていました。

父がこの保育園で大切にしてきた「キリスト教保育」を、父がいなくなった後、どう担っていけばよいか、ずっと私の課題でした。それは今でも課題だと思っています。

聖書の中に「信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中でもっとも大いなるものは、愛である」(コリント信徒への第1の手紙13章13節)というのがあります。

父の生き様は、このことを身をもって私たちに教えてくれたように思います。病気を宣告された後も、その病気を受け入れ、すべてを神様にゆだねて、希望をもって最後まで心穏やかに生きることができたのは、強い信仰があったからに他なりません。そして、最後の最後まで自分のことより、人の心配をしていた父の深い愛情。私は、子どものころから父に怒られた記憶がありません。怒られるようなことをしたときでも、何がいけなかったのかを優しく諭してくれていました。目を閉じて思い浮かぶのは、いつも父の優しい笑顔です。以前のからたちにも書いたことがあります、「やさしさ」や、「思いやり」といったものは、教えて身につくものではありません。「思いやりの心が大事だよ、人に優しくしなさい」などと、子どもに何千回、何万回言ったところで、その子に思いやりの心が育つわけではありません。父はよく、子育てには「ぬくもり」が必要だと言っていました。その「ぬくもり」という言葉に表される深い愛情は、それをたっぷり受けて育てこそ、他の人にも愛情を注ぐことができるようになるのだと思います。

父が大切にしてきた「キリスト教保育」、形式的なことだけではなく、本質的な部分で、「深い愛情で子どもたちを包み、ぬくもりが感じられるような保育」を今後も大事に守りながら、がんばっていきたいと思います。皆様にも温かく見守っていただけたらと思います。